

# 四 半 期 報 告 書

(第205期第2四半期)

株 式 会 社

四 国 銀 行

---

# 四 半 期 報 告 書

---

- 1 本書は四半期報告書を金融商品取引法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した四半期報告書に添付された中間監査報告書及び上記の四半期報告書と同時に提出した確認書を末尾に綴じ込んでおります。

# 目 次

	頁
【表紙】 .....	1
第一部 【企業情報】 .....	2
第1 【企業の概況】 .....	2
1 【主要な経営指標等の推移】 .....	2
2 【事業の内容】 .....	4
第2 【事業の状況】 .....	5
1 【事業等のリスク】 .....	5
2 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】 .....	5
3 【経営上の重要な契約等】 .....	10
第3 【提出会社の状況】 .....	11
1 【株式等の状況】 .....	11
2 【役員の状況】 .....	13
第4 【経理の状況】 .....	14
1 【中間連結財務諸表】 .....	15
2 【その他】 .....	45
3 【中間財務諸表】 .....	46
4 【その他】 .....	57
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】 .....	58

中間監査報告書

確認書

## 【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年11月12日
【四半期会計期間】	第205期第2四半期(自平成30年7月1日至平成30年9月30日)
【会社名】	株式会社四国銀行
【英訳名】	The Shikoku Bank, Ltd.
【代表者の役職氏名】	取締役頭取 山元文明
【本店の所在の場所】	高知市南はりまや町一丁目1番1号
【電話番号】	高知(088)823局2111番
【事務連絡者氏名】	総合企画部長 伊東瑞文
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区内神田一丁目14番4号 株式会社四国銀行東京事務所
【電話番号】	東京(03)3291局7481番
【事務連絡者氏名】	東京支店長兼東京事務所長 嶋崎靖
【縦覧に供する場所】	株式会社四国銀行徳島営業部 (徳島市八百屋町三丁目10番地2) 株式会社四国銀行東京支店 (東京都千代田区内神田一丁目13番7号) 株式会社四国銀行松山支店 (松山市三番町三丁目9番地4) 株式会社四国銀行高松支店 (高松市丸亀町8番地23) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

(注)高松支店は金融商品取引法の規定による縦覧場所ではありませんが、投資者の便宜のため縦覧に供しております。

## 第一部 【企業情報】

### 第1 【企業の概況】

#### 1 【主要な経営指標等の推移】

当行は、特定事業会社(企業内容等の開示に関する内閣府令第17条の15第2項に規定する事業を行う会社)に該当するため、第2四半期会計期間については、中間(連結)会計期間に係る主要な経営指標等の推移を掲げております。

(1) 最近3中間連結会計期間及び最近2連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

		平成28年度中間 連結会計期間	平成29年度中間 連結会計期間	平成30年度中間 連結会計期間	平成28年度	平成29年度
		(自平成28年 4月1日 至平成28年 9月30日)	(自平成29年 4月1日 至平成29年 9月30日)	(自平成30年 4月1日 至平成30年 9月30日)	(自平成28年 4月1日 至平成29年 3月31日)	(自平成29年 4月1日 至平成30年 3月31日)
連結経常収益	百万円	22,520	23,872	22,053	50,000	47,206
うち連結信託報酬	百万円	—	—	—	0	0
連結経常利益	百万円	5,581	7,313	5,686	12,563	12,187
親会社株主に帰属する中間純利益	百万円	3,571	4,440	3,997	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	—	—	—	8,869	7,157
連結中間包括利益	百万円	2,142	9,379	3,355	—	—
連結包括利益	百万円	—	—	—	4,148	9,695
連結純資産額	百万円	139,647	148,223	150,663	139,466	147,913
連結総資産額	百万円	3,022,813	3,145,892	3,099,556	3,042,700	3,027,431
1株当たり純資産額	円	3,140.04	3,461.49	3,511.85	3,257.33	3,453.89
1株当たり中間純利益	円	82.63	103.89	93.44	—	—
1株当たり当期純利益	円	—	—	—	205.87	167.47
潜在株式調整後1株当たり中間純利益	円	82.43	103.55	93.17	—	—
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	—	—	—	205.27	166.86
自己資本比率	%	4.49	4.70	4.85	4.57	4.87
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	128,106	72,922	35,756	72,794	△43,861
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	△42,339	42,005	△37	16,253	94,548
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	△845	△816	△5,790	△10,293	△1,637
現金及び現金同等物の 中間期末(期末)残高	百万円	223,379	331,329	296,203	217,214	266,271
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,439 [606]	1,437 [631]	1,419 [622]	1,390 [611]	1,394 [634]
信託財産額	百万円	79	73	65	77	70

- (注) 1 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
- 2 平成29年10月1日付で普通株式5株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額、1株当たり中間純利益、1株当たり当期純利益、潜在株式調整後1株当たり中間純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、平成28年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。
- 3 自己資本比率は、((中間)期末純資産の部合計－(中間)期末新株予約権－(中間)期末非支配株主持分)を(中間)期末資産の部の合計で除して算出しております。
- 4 信託財産額は、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務に係る信託財産額を記載しております。なお、連結会社のうち、該当する信託業務を営む会社は提出会社1社であります。

## (2) 当行の最近3中間会計期間及び最近2事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第203期中	第204期中	第205期中	第203期	第204期
決算年月		平成28年9月	平成29年9月	平成30年9月	平成29年3月	平成30年3月
経常収益	百万円	22,409	23,803	22,455	47,978	46,990
うち信託報酬	百万円	—	—	—	0	0
経常利益	百万円	5,307	7,056	6,010	10,336	11,556
中間純利益	百万円	3,557	4,262	4,387	—	—
当期純利益	百万円	—	—	—	7,096	6,687
資本金	百万円	25,000	25,000	25,000	25,000	25,000
発行済株式総数	千株	218,500	216,500	43,300	216,500	43,300
純資産額	百万円	136,872	143,412	145,940	135,260	142,786
総資産額	百万円	3,021,483	3,142,201	3,097,258	3,039,440	3,024,535
預金残高	百万円	2,506,455	2,610,770	2,617,730	2,563,647	2,628,469
貸出金残高	百万円	1,627,365	1,662,819	1,694,926	1,680,877	1,676,468
有価証券残高	百万円	1,091,941	1,023,518	968,128	1,044,755	958,490
1株当たり配当額	円	3.00	3.00	20.00	6.00	18.00
自己資本比率	%	4.52	4.55	4.70	4.44	4.71
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,389 [569]	1,387 [585]	1,374 [574]	1,338 [573]	1,345 [587]
信託財産額	百万円	79	73	65	77	70
信託勘定貸出金残高	百万円	—	—	—	—	—
信託勘定有価証券残高	百万円	—	—	—	—	—

(注) 1 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

2 第205期中間会計期間の1株当たり配当額のうち、5.00円は創業140周年記念配当であります。また、第204期の1株当たり配当額18.00円は、1株当たり中間配当額3.00円と1株当たり期末配当額15.00円の合計であります。平成29年10月1日付で普通株式5株を1株とする株式併合を実施したため、1株当たり中間配当額3.00円は当該株式併合前、1株当たり期末配当額15.00円は当該株式併合後の金額となります。

3 自己資本比率は、((中間)期末純資産の部合計－(中間)期末新株予約権)を(中間)期末資産の部の合計で除して算出しております。

## 2 【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当行及び当行の関係会社が営む事業の内容については、重要な変更はありません。また、主要な関係会社についても、異動はありません。

## 第2 【事業の状況】

### 1 【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間における、本四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項の発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」について重要な変更はありません。

なお、重要事象等は存在していません。

### 2 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1) 財政状態及び経営成績の状況

当第2四半期連結累計期間のわが国経済は、雇用・所得環境の改善に支えられ、個人消費は持ち直しが続き、企業の生産活動は、自然災害等の影響によりやや下振れの動きがみられたものの、幅広い分野で緩やかに増加し、景気は緩やかに回復しました。

当行の主要地盤であります四国地区の経済におきましても、設備投資や輸出に持ち直しの動きが続き、個人消費も一部に豪雨災害等の影響がみられたものの、総じて底堅く推移しており、景気は緩やかな回復の動きとなりました。

金融面では、円相場は、期首の1米ドル105円台から緩やかな円安基調で推移し、9月末には1米ドル113円台となりました。日経平均株価は、期首の2万1千円台から円安や企業業績への期待、また過度な貿易摩擦懸念の緩和等から、9月末には2万4千円台となりました。長期金利は、概ね0.0%台が続いた後、7月の日銀金融政策決定会合における「長短金利操作」を含む金融政策の修正を受け上昇し、9月末には0.1%台となりました。

このような金融経済情勢のもとにありまして、当行グループ(当行、連結子会社及び持分法適用会社)は業績の向上と経営の効率化に努めました結果、当第2四半期連結累計期間におきまして次の業績をあげることができました。

主要勘定につきましては、預金は、個人預金は増加しましたが法人預金と地方公共団体預金の減少により、前連結会計年度末比103億円減少し2兆6,160億円となりました。また譲渡性預金を含めた預金等は、前連結会計年度末比422億円増加し2兆7,236億円となりました。貸出金は、事業性貸出金、個人向け貸出金及び地方公共団体向け貸出金の増加により、前連結会計年度末比185億円増加し1兆6,954億円となりました。有価証券は、公共債の購入等により、前連結会計年度末比96億円増加し9,719億円となりました。

損益につきましては、経常収益は、有価証券利息配当金は増加しましたが国債等債券売却益や貸倒引当金戻入益の減少等により、前年同連結累計期間比18億19百万円減少し220億53百万円となりました。一方、経常費用が前年同連結累計期間比1億92百万円減少したため、経常利益は同16億27百万円減少し56億86百万円、親会社株主に帰属する中間純利益は同4億43百万円減少し39億97百万円となりました。

なお、セグメント情報ごとの業績の状況につきましては、報告セグメントは銀行業単一であり、記載を省略しております。

#### (2) キャッシュ・フローの状況

営業活動によるキャッシュ・フローは、譲渡性預金の増加等により357億56百万円のプラスとなりました。前年同連結累計期間比371億66百万円減少しております。投資活動によるキャッシュ・フローは37百万円のマイナスとなりました。前年同連結累計期間比420億42百万円減少しております。財務活動によるキャッシュ・フローは、劣後特約付借入金の返済による支出等により57億90百万円のマイナスとなりました。前年同連結累計期間比49億74百万円減少しております。この結果、現金及び現金同等物の当第2四半期連結累計期間末残高は、当第2四半期連結累計期間中に299億31百万円増加し2,962億3百万円となりました。



国内・国際業務部門別収支

(国内業務部門)

資金運用収支は、資金運用収益が有価証券利息配当金の増加等により前年同連結累計期間比6億27百万円増加し、資金調達費用が預金利息の減少等により同1億37百万円減少したため、同7億64百万円増加し129億19百万円となりました。

役務取引等収支は、役務取引等収益が前年同連結累計期間比31百万円減少し、役務取引等費用が同95百万円増加したため、同1億25百万円減少し21億29百万円となりました。

その他業務収支は、その他業務収益が国債等債券売却益の減少等により前年同連結累計期間比6億5百万円減少し、その他業務費用が国債等債券償還損の減少等により同3億49百万円減少したため、同2億59百万円減少し1億72百万円の支出超過となりました。

(国際業務部門)

資金運用収支は、資金運用収益が貸出金利息や有価証券利息配当金の増加等により前年同連結累計期間比2億8百万円増加しましたが、資金調達費用が預金利息や金利スワップ支払利息の増加等により同2億84百万円増加したため、同75百万円減少し17億21百万円となりました。

役務取引等収支は、前年同連結累計期間15百万円減少し6百万円となりました。

その他業務収支は、その他業務収益が国債等債券売却益の減少等により前年同連結累計期間比8億89百万円減少し、その他業務費用が国債等債券売却損の増加等により同2億95百万円増加したため、同11億84百万円減少し1億94百万円の支出超過となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前第2四半期連結累計期間	12,155	1,796	13,952
	当第2四半期連結累計期間	12,919	1,721	14,641
うち資金運用収益	前第2四半期連結累計期間	12,982	2,407	56 15,332
	当第2四半期連結累計期間	13,609	2,615	34 16,189
うち資金調達費用	前第2四半期連結累計期間	826	610	56 1,380
	当第2四半期連結累計期間	689	894	34 1,548
役務取引等収支	前第2四半期連結累計期間	2,254	21	2,276
	当第2四半期連結累計期間	2,129	6	2,136
うち役務取引等収益	前第2四半期連結累計期間	3,279	38	3,317
	当第2四半期連結累計期間	3,248	37	3,286
うち役務取引等費用	前第2四半期連結累計期間	1,024	16	1,040
	当第2四半期連結累計期間	1,119	31	1,150
その他業務収支	前第2四半期連結累計期間	84	990	1,074
	当第2四半期連結累計期間	△172	△194	△366
うちその他業務収益	前第2四半期連結累計期間	718	1,443	2,162
	当第2四半期連結累計期間	113	554	667
うちその他業務費用	前第2四半期連結累計期間	634	453	1,087
	当第2四半期連結累計期間	285	748	1,034

(注) 1 国内業務部門は当行及び連結子会社の円建取引、国際業務部門は外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2 資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。

3 資金調達費用は金銭の信託運用見合費用(前第2四半期連結累計期間1百万円、当第2四半期連結累計期間0百万円)を控除して表示しております。

国内・国際業務部門別役務取引の状況

役務取引は、そのほとんどを国内業務部門で占めており、主要な役務取引の内訳は次のとおりであります。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前第2四半期連結累計期間	3,279	38	3,317
	当第2四半期連結累計期間	3,248	37	3,286
うち預金・貸出業務	前第2四半期連結累計期間	797	1	799
	当第2四半期連結累計期間	808	1	810
うち為替業務	前第2四半期連結累計期間	928	32	961
	当第2四半期連結累計期間	917	31	949
うち信託関連業務	前第2四半期連結累計期間	0	—	0
	当第2四半期連結累計期間	—	—	—
うち証券関連業務	前第2四半期連結累計期間	311	—	311
	当第2四半期連結累計期間	306	—	306
うち代理業務	前第2四半期連結累計期間	456	—	456
	当第2四半期連結累計期間	473	—	473
うち保護預り・貸金庫業務	前第2四半期連結累計期間	39	—	39
	当第2四半期連結累計期間	38	—	38
うち保証業務	前第2四半期連結累計期間	119	0	119
	当第2四半期連結累計期間	115	0	116
役務取引等費用	前第2四半期連結累計期間	1,024	16	1,040
	当第2四半期連結累計期間	1,119	31	1,150
うち為替業務	前第2四半期連結累計期間	146	14	160
	当第2四半期連結累計期間	147	29	176

(注) 国内業務部門は当行及び連結子会社の円建取引、国際業務部門は外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

国内・国際業務部門別預金残高の状況

○ 預金の種類別残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前第2四半期連結会計期間	2,567,208	41,728	2,608,936
	当第2四半期連結会計期間	2,575,263	40,808	2,616,072
うち流動性預金	前第2四半期連結会計期間	1,373,697	—	1,373,697
	当第2四半期連結会計期間	1,428,479	—	1,428,479
うち定期性預金	前第2四半期連結会計期間	1,184,837	—	1,184,837
	当第2四半期連結会計期間	1,132,055	—	1,132,055
うちその他	前第2四半期連結会計期間	8,673	41,728	50,401
	当第2四半期連結会計期間	14,728	40,808	55,536
譲渡性預金	前第2四半期連結会計期間	129,523	—	129,523
	当第2四半期連結会計期間	107,555	—	107,555
総合計	前第2四半期連結会計期間	2,696,732	41,728	2,738,460
	当第2四半期連結会計期間	2,682,818	40,808	2,723,627

(注) 1 国内業務部門は円建取引、国際業務部門は外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2 流動性預金＝当座預金＋普通預金＋貯蓄預金＋通知預金

3 定期性預金＝定期預金＋定期積金

貸出金残高の状況

○ 業種別貸出状況(末残・構成比)

業種別	前第2四半期連結会計期間		当第2四半期連結会計期間	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	1,663,261	100.00	1,695,403	100.00
製造業	198,529	11.94	198,835	11.73
農業、林業	1,756	0.11	2,216	0.13
漁業	2,317	0.14	2,038	0.12
鉱業、採石業、砂利採取業	2,060	0.12	2,000	0.12
建設業	43,774	2.63	45,056	2.66
電気・ガス・熱供給・水道業	44,149	2.65	47,521	2.80
情報通信業	10,706	0.64	13,095	0.77
運輸業、郵便業	40,073	2.41	40,104	2.36
卸売業	92,359	5.55	89,715	5.29
小売業	106,409	6.40	103,080	6.08
金融業、保険業	36,736	2.21	33,724	1.99
不動産業	224,450	13.49	238,605	14.07
物品賃貸業	45,804	2.75	41,818	2.47
学術研究、専門・技術サービス業	5,186	0.31	5,745	0.34
宿泊業	7,713	0.46	7,587	0.45
飲食業	9,511	0.57	9,617	0.57
生活関連サービス業、娯楽業	26,720	1.61	26,623	1.57
教育、学習支援業	11,071	0.67	12,646	0.75
医療・福祉	106,082	6.38	107,324	6.33
その他のサービス	25,588	1.54	27,353	1.61
地方公共団体	249,745	15.02	251,759	14.85
その他	372,514	22.40	388,931	22.94
特別国際金融取引勘定分	—	—	—	—
政府等	—	—	—	—
金融機関	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	1,663,261	—	1,695,403	—

「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務の状況

連結会社のうち、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づき信託業務を営む会社は提出会社1社であります。

信託財産の運用／受入状況(信託財産残高表)

資産				
科目	前連結会計年度 (平成30年3月31日)		当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
現金預け金	70	100.00	65	100.00
合計	70	100.00	65	100.00

負債				
科目	前連結会計年度 (平成30年3月31日)		当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
金銭信託	70	100.00	65	100.00
合計	70	100.00	65	100.00

(注) 1 共同信託他社管理財産 前連結会計年度一百万円、当中間連結会計期間一百万円

2 元本補填契約のある信託については、前連結会計年度及び当中間連結会計期間の取扱残高はありません。

(3) 経営方針・経営戦略等、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等、事業上及び財務上の対処すべき課題、研究開発活動

当第2四半期連結累計期間において、連結会社の経営方針・経営戦略等、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等について、重要な変更及び新たに定めたものはありません。また、事業上及び財務上の対処すべき課題について、重要な変更及び新たに生じた課題はありません。研究開発活動については該当ありません。

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を、オペレーショナル・リスク相当額については基礎的手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

			平成30年9月30日
1. 連結自己資本比率(2/3)	%		9.87
2. 連結における自己資本の額	億円		134,940
3. リスク・アセットの額	億円		1,367,097
4. 連結総所要自己資本額	億円		54,683

単体自己資本比率(国内基準)

			平成30年9月30日
1. 自己資本比率(2/3)	%		9.53
2. 単体における自己資本の額	億円		129,579
3. リスク・アセットの額	億円		1,358,633
4. 単体総所要自己資本額	億円		54,345

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の中間貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに中間貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3カ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	平成29年9月30日	平成30年9月30日
	金額(百万円)	金額(百万円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	4,639	5,268
危険債権	34,658	30,667
要管理債権	3,372	3,376
正常債権	1,650,542	1,685,014

3 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

### 第3 【提出会社の状況】

#### 1 【株式等の状況】

##### (1) 【株式の総数等】

###### ① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	100,000,000
計	100,000,000

###### ② 【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間 末現在発行数(株) (平成30年9月30日)	提出日現在 発行数(株) (平成30年11月12日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	43,300,000	同左	東京証券取引所 市場第1部	単元株式数は100株でありま す。
計	43,300,000	同左	—	—

##### (2) 【新株予約権等の状況】

###### ① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

###### ② 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

##### (3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

##### (4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成30年9月30日	—	43,300	—	25,000	—	6,563

## (5) 【大株主の状況】

平成30年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合(%)
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	4,227	9.84
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内2丁目1番1号	1,815	4.22
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,181	2.74
日垂化学工業株式会社	徳島県阿南市上中町岡491番地100	988	2.30
日本マスタートラスト信託銀行株式 会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	960	2.23
四国銀行従業員持株会	高知市南はりまや町一丁目1番1	865	2.01
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内1丁目6番6号	771	1.79
損害保険ジャパン日本興亜株式会社	東京都新宿区西新宿1丁目26番1号	756	1.76
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	754	1.75
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	589	1.37
計	—	12,910	30.05

(注) 上記の信託銀行所有株式数のうち、当該銀行の信託業務に係る株式数は、次のとおりです。

日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	4,227千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	1,181千株
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	960千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口9)	754千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	589千株

## (6) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

平成30年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 340,800	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 42,745,600	427,456	—
単元未満株式	普通株式 213,600	—	1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	43,300,000	—	—
総株主の議決権	—	427,456	—

② 【自己株式等】

平成30年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 当行	高知市南はりまや町 一丁目1番1号	340,800	—	340,800	0.78
計	—	340,800	—	340,800	0.78

(注) 株主名簿上は、当行名義となっていますが、実質的に所有していない株式が2百株(議決権2個)あります。  
なお、当該株式は上記「発行済株式」の「完全議決権株式(その他)」欄に含まれております。

2 【役員の様況】

前事業年度の有価証券報告書提出日後、当四半期累計期間において、役員の様動はありません。



## 第4 【経理の状況】

- 1 当行は、特定事業会社(企業内容等の開示に関する内閣府令第17条の15第2項に規定する事業を行う会社)に該当するため、第2四半期会計期間については、中間連結財務諸表及び中間財務諸表を作成しております。
- 2 当行の中間連結財務諸表は、「中間連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成11年大蔵省令第24号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 3 当行の中間財務諸表は、「中間財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和52年大蔵省令第38号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 4 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、中間連結会計期間(自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)の中間連結財務諸表及び中間会計期間(自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)の中間財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人の中間監査を受けております。  
なお、新日本有限責任監査法人は、名称変更により、平成30年7月1日をもって、EY新日本有限責任監査法人となりました。

1 【中間連結財務諸表】

(1) 【中間連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	267,180	297,049
コールローン及び買入手形	3,971	761
買入金銭債権	13,696	11,160
商品有価証券	10	41
金銭の信託	1,000	999
有価証券	※1, ※7, ※12 962,347	※1, ※7, ※12 971,979
貸出金	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※8 1,676,899	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※8 1,695,403
外国為替	※6 6,288	※6 6,671
その他資産	※7 67,129	※7 85,968
有形固定資産	※9, ※10 38,398	※9, ※10 38,317
無形固定資産	3,299	3,227
退職給付に係る資産	—	200
繰延税金資産	17	16
支払承諾見返	5,613	6,090
貸倒引当金	△18,421	△18,331
<b>資産の部合計</b>	<b>3,027,431</b>	<b>3,099,556</b>
<b>負債の部</b>		
預金	※7 2,626,389	※7 2,616,072
譲渡性預金	54,964	107,555
コールマネー及び売渡手形	8,005	11,769
債券貸借取引受入担保金	※7 36,061	※7 75,029
借入金	※7, ※11 104,694	※7, ※11 93,039
外国為替	15	13
その他負債	30,508	26,801
退職給付に係る負債	776	67
役員退職慰労引当金	12	3
睡眠預金払戻損失引当金	1,333	1,151
ポイント引当金	39	42
繰延税金負債	6,628	6,783
再評価に係る繰延税金負債	※9 4,474	※9 4,472
支払承諾	5,613	6,090
<b>負債の部合計</b>	<b>2,879,518</b>	<b>2,948,892</b>
<b>純資産の部</b>		
資本金	25,000	25,000
資本剰余金	9,699	9,699
利益剰余金	81,975	85,249
自己株式	△1,262	△1,065
<b>株主資本合計</b>	<b>115,412</b>	<b>118,883</b>
その他有価証券評価差額金	27,886	26,456
繰延ヘッジ損益	△4,191	△3,469
土地再評価差額金	※9 9,088	※9 9,086
退職給付に係る調整累計額	△585	△519
その他の包括利益累計額合計	32,197	31,553
新株予約権	175	100
非支配株主持分	128	127
<b>純資産の部合計</b>	<b>147,913</b>	<b>150,663</b>
<b>負債及び純資産の部合計</b>	<b>3,027,431</b>	<b>3,099,556</b>

## (2) 【中間連結損益計算書及び中間連結包括利益計算書】

## 【中間連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前中間連結会計期間 (自 平成29年 4月 1日 至 平成29年 9月 30日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年 4月 1日 至 平成30年 9月 30日)
経常収益	23,872	22,053
資金運用収益	15,332	16,189
(うち貸出金利息)	10,101	10,063
(うち有価証券利息配当金)	5,144	6,057
役務取引等収益	3,317	3,286
その他業務収益	2,162	667
その他経常収益	※1 3,060	※1 1,909
経常費用	16,559	16,367
資金調達費用	1,381	1,548
(うち預金利息)	463	389
役務取引等費用	1,040	1,150
その他業務費用	1,087	1,034
営業経費	※2 12,492	※2 12,367
その他経常費用	※3 556	※3 265
経常利益	7,313	5,686
特別利益	0	9
固定資産処分益	0	9
特別損失	347	41
固定資産処分損	11	6
減損損失	※4 335	※4 35
税金等調整前中間純利益	6,966	5,654
法人税、住民税及び事業税	2,078	1,134
法人税等調整額	448	521
法人税等合計	2,527	1,656
中間純利益	4,439	3,997
非支配株主に帰属する中間純損失(△)	△0	△0
親会社株主に帰属する中間純利益	4,440	3,997

【中間連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前中間連結会計期間 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成29年 9 月 30 日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年 4 月 1 日 至 平成30年 9 月 30 日)
中間純利益	4,439	3,997
その他の包括利益	4,940	△642
その他有価証券評価差額金	4,701	△1,355
繰延ヘッジ損益	△58	721
退職給付に係る調整額	124	65
持分法適用会社に対する持分相当額	173	△74
中間包括利益	9,379	3,355
(内訳)		
親会社株主に係る中間包括利益	9,380	3,355
非支配株主に係る中間包括利益	△0	△0

## (3) 【中間連結株主資本等変動計算書】

前中間連結会計期間(自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	25,000	9,699	75,508	△1,268	108,939
当中間期変動額					
剰余金の配当			△642		△642
親会社株主に帰属する 中間純利益			4,440		4,440
自己株式の取得				△3	△3
自己株式の処分			△6	14	7
土地再評価差額金の取崩			109		109
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)					
当中間期変動額合計	—	—	3,900	11	3,911
当中間期末残高	25,000	9,699	79,408	△1,257	112,850

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配 株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計			
当期首残高	25,316	△4,054	9,690	△688	30,263	135	127	139,466
当中間期変動額								
剰余金の配当								△642
親会社株主に帰属する 中間純利益								4,440
自己株式の取得								△3
自己株式の処分								7
土地再評価差額金の取崩								109
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)	4,874	△58	△109	124	4,831	16	△1	4,845
当中間期変動額合計	4,874	△58	△109	124	4,831	16	△1	8,756
当中間期末残高	30,190	△4,113	9,581	△564	35,094	152	125	148,223

当中間連結会計期間(自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	25,000	9,699	81,975	△1,262	115,412
当中間期変動額					
剰余金の配当			△642		△642
親会社株主に帰属する 中間純利益			3,997		3,997
自己株式の取得				△0	△0
自己株式の処分			△83	197	114
土地再評価差額金の取崩			2		2
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)					
当中間期変動額合計	—	—	3,273	196	3,470
当中間期末残高	25,000	9,699	85,249	△1,065	118,883

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配 株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計			
当期首残高	27,886	△4,191	9,088	△585	32,197	175	128	147,913
当中間期変動額								
剰余金の配当								△642
親会社株主に帰属する 中間純利益								3,997
自己株式の取得								△0
自己株式の処分								114
土地再評価差額金の取崩								2
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)	△1,429	721	△2	65	△644	△74	△1	△720
当中間期変動額合計	△1,429	721	△2	65	△644	△74	△1	2,749
当中間期末残高	26,456	△3,469	9,086	△519	31,553	100	127	150,663

## (4) 【中間連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前中間連結会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前中間純利益	6,966	5,654
減価償却費	994	1,194
減損損失	335	35
持分法による投資損益 (△は益)	△20	△75
貸倒引当金の増減 (△)	△1,259	△90
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	—	△200
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△899	△708
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△5	△8
睡眠預金払戻損失引当金の増減 (△)	209	△181
ポイント引当金の増減額 (△は減少)	2	3
資金運用収益	△15,332	△16,189
資金調達費用	1,381	1,548
有価証券関係損益 (△)	△1,477	△747
金銭の信託の運用損益 (△は運用益)	△291	0
為替差損益 (△は益)	△3	△2
固定資産処分損益 (△は益)	11	△2
貸出金の純増 (△) 減	17,959	△18,504
預金の純増減 (△)	46,930	△10,317
譲渡性預金の純増減 (△)	74,023	52,590
借入金 (劣後特約付借入金を除く) の純増減 (△)	8,220	△6,655
預け金 (日銀預け金を除く) の純増 (△) 減	△106	61
コールローン等の純増 (△) 減	1,916	5,745
商品有価証券の純増 (△) 減	△2	△31
コールマネー等の純増減 (△)	△16,822	3,763
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)	△12,259	38,967
外国為替 (資産) の純増 (△) 減	1,601	△382
外国為替 (負債) の純増減 (△)	13	△2
資金運用による収入	14,766	14,640
資金調達による支出	△1,432	△1,667
その他	△50,017	△31,119
小計	75,401	37,317
法人税等の支払額	△2,479	△1,561
営業活動によるキャッシュ・フロー	72,922	35,756
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有価証券の取得による支出	△150,637	△131,288
有価証券の売却による収入	166,195	90,842
有価証券の償還による収入	28,419	41,392
金銭の信託の増加による支出	△1,000	—
有形固定資産の取得による支出	△599	△586
有形固定資産の売却による収入	9	29
無形固定資産の取得による支出	△382	△425
資産除去債務の履行による支出	—	△1
投資活動によるキャッシュ・フロー	42,005	△37

(単位：百万円)

	前中間連結会計期間 (自 平成29年 4月 1日 至 平成29年 9月30日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年 4月 1日 至 平成30年 9月30日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
劣後特約付借入金返済による支出	—	△5,000
配当金の支払額	△641	△640
非支配株主への配当金の支払額	△1	△1
自己株式の取得による支出	△3	△0
自己株式の売却による収入	0	28
リース債務の返済による支出	△170	△176
財務活動によるキャッシュ・フロー	△816	△5,790
現金及び現金同等物に係る換算差額	3	2
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	114,114	29,931
現金及び現金同等物の期首残高	217,214	266,271
現金及び現金同等物の中間期末残高	※1 331,329	※1 296,203



## 【注記事項】

(中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

### 1 連結の範囲に関する事項

#### (1) 連結子会社 4社

会社名 四銀代理店株式会社  
四国保証サービス株式会社  
四銀コンピューターサービス株式会社  
株式会社四銀地域経済研究所

#### (2) 非連結子会社 1社

会社名 しぎん地域活性化投資事業有限責任組合

非連結子会社は、その資産、経常収益、中間純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

### 2 持分法の適用に関する事項

#### (1) 持分法適用の非連結子会社 0社

#### (2) 持分法適用の関連会社 1社

会社名 四銀総合リース株式会社

#### (3) 持分法非適用の非連結子会社 1社

会社名 しぎん地域活性化投資事業有限責任組合

#### (4) 持分法非適用の関連会社 2社

会社名 高知県観光活性化投資事業有限責任組合  
四国アライアンスキャピタル株式会社

持分法非適用の非連結子会社及び関連会社は、中間純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても中間連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

### 3 連結子会社の中間決算日等に関する事項

連結子会社の中間決算日は次のとおりであります。

9月末日 4社

### 4 会計方針に関する事項

#### (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

#### (2) 有価証券の評価基準及び評価方法

(イ)有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、持分法非適用の関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として中間連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては、移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(ロ)有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

#### (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

#### (4) 固定資産の減価償却の方法

##### ① 有形固定資産(リース資産を除く)

当行の有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。)並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用し、年間減価償却費見積額を期間により按分し計上しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 19年～50年

その他 5年～15年

連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。

##### ② 無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

##### ③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、零としております。

#### (5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

貸出条件緩和債権等を有する債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利率で割り引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は10,748百万円(前連結会計年度末は12,348百万円)であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認めた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

#### (6) 役員退職慰労引当金の計上基準

連結子会社の役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払に備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当中間連結会計期間末までに発生していると認められる額を計上しております。

#### (7) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積もり、必要と認める額を計上しております。

#### (8) ポイント引当金の計上基準

ポイント引当金は、クレジットカードの将来のポイント利用による費用負担に備えるため、将来利用される見込額を合理的に見積もり、必要と認める額を計上しております。

(9) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当中間連結会計期間末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の費用処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理  
数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理

なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る当中間連結会計期間末の自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(10) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行の外貨建資産・負債は、中間連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(11) 重要なヘッジ会計の方法

(イ) 金利リスク・ヘッジ

当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、繰延ヘッジによっております。ヘッジ取引は当行の有価証券等会計基準に則り、ヘッジ対象である一部の貸出金及び有価証券から生じる金利リスクを回避するため、ヘッジ手段として各取引ごとに金利スワップ取引を行う「個別ヘッジ」を実施しております。ヘッジ手段とヘッジ対象を一体管理するとともに、ヘッジ手段によってヘッジ対象の金利リスクが減殺されているかどうかを検証することで、ヘッジの有効性を評価しております。

(ロ) 為替変動リスク・ヘッジ

当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号平成14年7月29日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

(12) 中間連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

中間連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、中間連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(13) 消費税等の会計処理

当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(中間連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社及び関連会社の株式又は出資金の総額

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
株式	3,580百万円	3,580百万円
出資金	181百万円	235百万円

※2 貸出金のうち、破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
破綻先債権額	573百万円	528百万円
延滞債権額	35,831百万円	35,653百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

※3 前連結会計年度及び当中間連結会計期間において、貸出金のうち、3カ月以上延滞債権はありません。

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

※4 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
貸出条件緩和債権額	3,115百万円	3,376百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

※5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
合計額	39,521百万円	39,558百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

※6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
12,252百万円	10,605百万円

※7 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
担保に供している資産		
有価証券	182,977百万円	224,189百万円
計	182,977百万円	224,189百万円
担保資産に対応する債務		
預金	11,968百万円	4,713百万円
債券貸借取引受入担保金	36,061百万円	75,029百万円
借入金	91,811百万円	85,399百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
有価証券	48,986百万円	13,449百万円

また、その他資産には、先物取引差入証拠金、金融商品等差入担保金、中央清算機関差入証拠金及び保証金等が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
先物取引差入証拠金	10百万円	11百万円
金融商品等差入担保金	8,322百万円	8,826百万円
中央清算機関差入証拠金	41,500百万円	64,800百万円
保証金等	722百万円	709百万円

※8 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
融資未実行残高	545,159百万円	553,402百万円
うち原契約期間が1年以内のもの 又は任意の時期に無条件で取消可 能なもの	528,583百万円	539,961百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※9 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

平成10年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める地価税法(平成3年法律第69号)第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法に基づいて、奥行価格補正等合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用土地の期末における時価の合計額と当該事業用土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
11,610百万円	11,443百万円

※10 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
減価償却累計額	27,862百万円	28,327百万円

※11 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
劣後特約付借入金	10,000百万円	5,000百万円

※12 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
20,384百万円	21,593百万円

(中間連結損益計算書関係)

※1 その他経常収益には、次のものを含んでおります。

	前中間連結会計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
貸倒引当金戻入益	967百万円	一百万円
償却債権取立益	535百万円	263百万円
株式等売却益	278百万円	1,080百万円

※2 営業経費には、次のものを含んでおります。

	前中間連結会計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
給与・手当	5,221百万円	5,189百万円

※3 その他経常費用には、次のものを含んでおります。

	前中間連結会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
貸倒引当金繰入額	一百万円	150百万円
貸出金償却	95百万円	35百万円
株式等売却損	70百万円	42百万円

※4 減損損失

継続的な地価の下落及び営業キャッシュ・フローの減少等により投資額の回収が見込めなくなったことに伴い、以下の資産について帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

前中間連結会計期間(自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)

(高知県内)

主な用途	種類	減損損失(百万円)
営業店舗1カ店	土地及び建物	8
		(うち土地 3)
		(うち建物 4)
遊休資産3カ所	土地及び建物	283
		(うち土地 265)
		(うち建物 17)

(高知県外)

主な用途	種類	減損損失(百万円)
遊休資産3カ所	土地及び建物	44
		(うち土地 38)
		(うち建物 6)

当中間連結会計期間(自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)

(高知県内)

主な用途	種類	減損損失(百万円)
営業店舗2カ店	建物	10
遊休資産3カ所	土地及び建物	18
		(うち土地 6)
		(うち建物 11)

(高知県外)

主な用途	種類	減損損失(百万円)
遊休資産2カ所	土地及び建物	6
		(うち土地 5)
		(うち建物 1)

営業店舗については、管理会計において継続的な収支の把握を行っている単位である各営業店(ただし、連携して営業を行っている営業店グループは当該各グループ)を、また遊休資産等については、将来の処分が意思決定された資産グループも含めて各資産をグルーピングの最小単位としております。また、連結子会社は各社を一つの単位としてグルーピングを行っております。

減損損失の測定に使用した回収可能価額は、主として鑑定評価額等に基づき算定した正味売却価額等によっております。

(中間連結株主資本等変動計算書関係)

前中間連結会計期間(自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数 (千株)	当中間連結会計 期間増加株式数 (千株)	当中間連結会計 期間減少株式数 (千株)	当中間連結会計 期間末株式数 (千株)	摘要
発行済株式					
普通株式	216,500	—	—	216,500	
自己株式					
普通株式	2,822	11	36	2,797	(注)1、(注)2

(注) 1 当中間連結会計期間増加自己株式数は、単元未満株式の買取りによるものであります。

2 当中間連結会計期間減少自己株式数は、新株予約権の行使によるもの35千株及び単元未満株式の買増しによるもの0千株であります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権 の内訳	新株予約権 の目的と なる株式の 種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当中間連結 会計期間末 残高 (百万円)	摘要
			当連結会計 年度期首	当中間連結会計期間			
				増加	減少		
当行	ストック・ オプション としての 新株予約権		—			152	
合計			—			152	

3 配当に関する事項

(1) 当中間連結会計期間中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月27日 定時株主総会	普通株式	642	3.00	平成29年3月31日	平成29年6月28日

(2) 基準日が当中間連結会計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当中間連結会計期間の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年11月10日 取締役会	普通株式	642	利益剰余金	3.00	平成29年9月30日	平成29年12月8日

(注) 1株当たり配当額については、基準日が平成29年9月30日であるため、平成29年10月1日付の株式併合は加味しておりません。



当中間連結会計期間（自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日）

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数 (千株)	当中間連結会計 期間増加株式数 (千株)	当中間連結会計 期間減少株式数 (千株)	当中間連結会計 期間末株式数 (千株)	摘要
発行済株式					
普通株式	43,300	—	—	43,300	
自己株式					
普通株式	562	0	99	463	(注) 1、(注) 2

(注) 1 当中間連結会計期間増加自己株式数は、単元未満株式の買取りによるものであります。

2 当中間連結会計期間減少自己株式数は、新株予約権の行使によるもの78千株、譲渡制限付株式の割当によるもの21千株及び単元未満株式の買増しによるもの0千株であります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権 の内訳	新株予約権 の目的と なる株式の 種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当中間連結 会計期間末 残高 (百万円)	摘要	
			当連結会計 年度期首	当中間連結会計期間				当中間連結 会計期間末
				増加	減少			
当行	ストック・ オプション としての 新株予約権		—			100		
合計			—			100		

3 配当に関する事項

(1) 当中間連結会計期間中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成30年6月26日 定時株主総会	普通株式	642	15.00	平成30年3月31日	平成30年6月27日

(2) 基準日が当中間連結会計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当中間連結会計期間の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成30年11月9日 取締役会	普通株式	859	利益剰余金	20.00	平成30年9月30日	平成30年12月7日

(注) 1株当たり配当額のうち、5.00円は創業140周年記念配当であります。

(中間連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の中間期末残高と中間連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前中間連結会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
現金預け金勘定	332,094百万円	297,049百万円
その他預け金	△765百万円	△846百万円
現金及び現金同等物	331,329百万円	296,203百万円

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

主として、現金自動設備及び事務機器であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項」の「(4) 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

		前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
1年内	百万円	136	143
1年超	百万円	243	207
合計	百万円	379	350

(金融商品関係)

金融商品の時価等に関する事項

中間連結貸借対照表計上額(連結貸借対照表計上額)、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません((注2)参照)。

前連結会計年度(平成30年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金預け金	267,180	267,180	—
(2) コールローン及び買入手形	3,971	3,971	—
(3) 買入金銭債権	13,696	13,696	—
(4) 商品有価証券			
売買目的有価証券	10	10	—
(5) 金銭の信託	1,000	1,000	—
(6) 有価証券			
その他有価証券	948,744	948,744	—
(7) 貸出金	1,676,899		
貸倒引当金(*1)	△18,341		
	1,658,557	1,673,740	15,182
(8) 外国為替(*1)	6,288	6,288	—
資産計	2,899,448	2,914,630	15,182
(1) 預金	2,626,389	2,626,604	215
(2) 譲渡性預金	54,964	54,966	1
(3) コールマネー及び売渡手形	8,005	8,005	—
(4) 債券貸借取引受入担保金	36,061	36,061	—
(5) 借入金	104,694	104,703	8
(6) 外国為替	15	15	—
負債計	2,830,132	2,830,357	225
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	974	974	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(8,722)	(8,722)	—
デリバティブ取引計	(7,747)	(7,747)	—

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(\*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については( )で表示しております。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

	中間連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金預け金	297,049	297,049	—
(2) コールローン及び買入手形	761	761	—
(3) 買入金銭債権	11,160	11,160	—
(4) 商品有価証券			
売買目的有価証券	41	41	—
(5) 金銭の信託	999	999	—
(6) 有価証券			
その他有価証券	958,422	958,422	—
(7) 貸出金	1,695,403		
貸倒引当金(*1)	△ 18,260		
	1,677,143	1,689,924	12,781
(8) 外国為替(*1)	6,671	6,671	—
資産計	2,952,248	2,965,029	12,781
(1) 預金	2,616,072	2,616,193	121
(2) 譲渡性預金	107,555	107,558	3
(3) コールマネー及び売渡手形	11,769	11,769	—
(4) 債券貸借取引受入担保金	75,029	75,029	—
(5) 借入金	93,039	93,046	7
(6) 外国為替	13	13	—
負債計	2,903,479	2,903,611	132
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(1,048)	(1,048)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(8,343)	(8,343)	—
デリバティブ取引計	(9,391)	(9,391)	—

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、外国為替に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、中間連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(\*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については( )で表示しております。

(注1) 金融商品の時価算定方法

資産

(1) 現金預け金

満期のない預け金であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) コールローン及び買入手形

これらは、約定期間が短期間であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) 買入金銭債権

約定期間が短期間であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(4) 商品有価証券

ディーリング業務のために保有している債券等の有価証券については、日本証券業協会の公表する価格等を時価としております。

(5) 金銭の信託

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券については、株式は取引所の価格、債券は日本証券業協会の公表する価格等を時価とすることとしております。また、コールローン及び金融機関預け金については、約定期間が短期間又は満期がなく、時価と帳簿価額が近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(6) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は日本証券業協会の公表する価格等を時価としております。上場投資信託は取引所の価格、非上場投資信託は投資信託委託会社の公表する基準価格等を時価としております。

自行保証付私募債は将来キャッシュ・フローを見積もり、市場金利に内部格付及び担保等を反映した信用コスト率を加えた割引率で割り引いた額を時価としております。ただし、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先の発行する私募債については、担保及び保証による回収見込額等を時価としております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

(7) 貸出金

貸出金は将来キャッシュ・フローを見積もり、市場金利に内部格付及び担保等を反映した信用コスト率を加えた割引率で割り引いた額を時価としております。外貨貸出金については、変動金利であり、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が融資実行後大きく異ならない限り時価と帳簿価額が近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当座貸越は、返済期限を設けているものを除き、帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は中間連結決算日(連結決算日)における中間連結貸借対照表(連結貸借対照表)上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

(8) 外国為替

外国為替は、他の銀行に対する外貨預け金(外国他店預け)、輸出手形・旅行小切手等(買入外国為替)、輸入手形による手形貸付(取立外国為替)であります。これらは、満期のない預け金、又は約定期間が短期間であり、それぞれ時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

## 負債

### (1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、中間連結決算日(連結決算日)に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価については、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。外貨預金及び非居住者円預金については、約定期間が短期間であり、時価と帳簿価額が近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

### (3) コールマネー及び売渡手形、及び(4) 債券貸借取引受入担保金

これらは、約定期間が短期間であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

### (5) 借入金

借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当行の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、将来キャッシュ・フローを算出し、当行が新規に借入する場合に適用される金利で割り引いた額を時価としております。

### (6) 外国為替

外国為替のうち、売渡外国為替及び未払外国為替は、外貨の売渡しや海外からの被仕向送金で支払銀行や顧客への決済が未了となっているもので、短期間で決済されるものであります。これらの時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

## デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の中間連結貸借対照表(連結貸借対照表)計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(6)有価証券」には含まれておりません。

区分		前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
① 非上場株式(*1)(*2)	百万円	6,792	6,812
② 非上場外国証券(*1)	百万円	1	1
③ 非連結子会社出資金(*1)	百万円	181	235
④ 関連会社株式(*1)	百万円	3,580	3,580
⑤ 投資事業組合出資金(*3)	百万円	3,047	2,928
合計	百万円	13,603	13,557

(\*1) 非上場株式、非上場外国証券、非連結子会社出資金及び関連会社株式につきましては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(\*2) 前連結会計年度において、非上場株式について0百万円減損処理を行っております。

当中間連結会計期間において、非上場株式について減損処理はありません。

(\*3) 投資事業組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(有価証券関係)

※ 「子会社株式及び関連会社株式」については、中間財務諸表における注記事項として記載しております。

1 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

2 その他有価証券

前連結会計年度(平成30年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えるもの	株式	54,125	26,376	27,749
	債券	515,931	505,809	10,122
	国債	252,036	243,410	8,626
	地方債	111,730	111,256	474
	短期社債	—	—	—
	社債	152,164	151,142	1,021
	その他	178,196	171,873	6,322
	小計	748,253	704,059	44,193
連結貸借対照表 計上額が取得原 価を超えないも の	株式	8,218	10,364	△2,145
	債券	91,651	91,914	△262
	国債	21,131	21,201	△69
	地方債	51,781	51,864	△83
	短期社債	—	—	—
	社債	18,738	18,847	△109
	その他	100,619	102,451	△1,831
	小計	200,490	204,729	△4,239
合計		948,744	908,789	39,954

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

	種類	中間連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
中間連結貸借対 照表計上額が取 得原価を超える もの	株式	53,984	26,834	27,149
	債券	414,174	406,393	7,781
	国債	241,552	234,593	6,958
	地方債	58,150	57,964	186
	短期社債	—	—	—
	社債	114,471	113,835	636
	その他	166,155	159,206	6,949
	小計	634,314	592,433	41,881
中間連結貸借対 照表計上額が取 得原価を超えな いもの	株式	8,449	9,838	△1,388
	債券	197,772	198,572	△799
	国債	23,253	23,511	△257
	地方債	114,897	115,234	△337
	短期社債	—	—	—
	社債	59,621	59,826	△204
	その他	117,885	119,690	△1,805
	小計	324,107	328,101	△3,993
合計	958,422	920,534	37,887	

### 3 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く。)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって中間連結貸借対照表計上額(連結貸借対照表計上額)とするとともに、評価差額を当中間連結会計期間(連結会計年度)の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理額は、社債91百万円であります。

当中間連結会計期間における減損処理はありません。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、中間連結会計期間末前(連結会計年度末前)1カ月の平均の時価が取得原価に比べて50%以上下落した場合は、全銘柄を著しい下落と判定し、30%以上50%未満下落した場合は、発行会社の信用リスク(自己査定における債務者区分・外部格付)を勘案し、過去の株価動向及び業績推移等により判定しております。

(金銭の信託関係)

#### 1 満期保有目的の金銭の信託

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

#### 2 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。



(その他有価証券評価差額金)

中間連結貸借対照表(連結貸借対照表)に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(平成30年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	39,699
その他有価証券	39,699
(△) 繰延税金負債	12,128
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	27,570
(△) 非支配株主持分相当額	—
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	315
その他有価証券評価差額金	27,886

(注) 投資事業有限責任組合等に係る評価差額21百万円については、「評価差額」の内訳「その他有価証券」に含めて記載しております。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

	金額(百万円)
評価差額	37,632
その他有価証券	37,632
(△) 繰延税金負債	11,417
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	26,215
(△) 非支配株主持分相当額	—
(+) 持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る評価差額金のうち親会社持分相当額	241
その他有価証券評価差額金	26,456

(注) 投資事業有限責任組合等に係る評価差額21百万円については、「評価差額」の内訳「その他有価証券」に含めて記載しております。

(デリバティブ取引関係)

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの中間連結決算日(連結決算日)における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(平成30年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
買建	—	—	—	—	
店頭	通貨スワップ	99,355	79,297	16	16
	為替予約				
	売建	96,177	5	978	978
	買建	1,732	5	△20	△20
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	その他				
売建	—	—	—	—	
買建	—	—	—	—	
	合計	—	—	974	974

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
買建	—	—	—	—	
店頭	通貨スワップ	99,600	89,788	13	13
	為替予約				
	売建	76,213	—	△1,091	△1,091
	買建	2,990	—	29	29
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	その他				
	売建	—	—	—	—
買建	—	—	—	—	
合計	—	—	△1,048	△1,048	

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を中間連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

(5) 商品関連取引

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引

前連結会計年度(平成30年3月31日)

該当事項はありません。

当中間連結会計期間(平成30年9月30日)

該当事項はありません。

(ストック・オプション等関係)

1 スtock・オプションに係る費用計上額及び科目名

	前中間連結会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
営業経費	23百万円	11百万円

2 スtock・オプションの内容

前中間連結会計期間(自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)

	平成29年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当行の取締役(社外取締役を除く) 9名
株式の種類別のストック・オプションの付与数(注)1	普通株式 159,600株
付与日	平成29年8月8日
権利確定条件	権利確定条件は付されていない。
対象勤務期間	対象勤務期間は定めていない。
権利行使期間	平成29年8月9日から平成59年8月8日まで
権利行使価格(注)2	1株当たり1円
付与日における公正な評価単価(注)2	1株当たり287円

(注) 1 株式数に換算して記載しております。

2 1株当たりに換算して記載しております。

当中間連結会計期間(自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)

該当事項はありません。

(資産除去債務関係)

資産除去債務の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当行グループは、一部で銀行業以外の事業を営んでおりますが、それらの事業は量的に重要性が乏しく、報告セグメントは銀行業単一となるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前中間連結会計期間(自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)

1 サービスごとの情報

	貸出業務 (百万円)	有価証券投資業務 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)
外部顧客に対する経常収益	11,678	7,564	4,629	23,872

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が中間連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦以外の国又は地域に所在している有形固定資産がないため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定顧客に対する経常収益で中間連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当中間連結会計期間(自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)

1 サービスごとの情報

	貸出業務 (百万円)	有価証券投資業務 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)
外部顧客に対する経常収益	10,402	7,781	3,869	22,053

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が中間連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦以外の国又は地域に所在している有形固定資産がないため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定顧客に対する経常収益で中間連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

**【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】**

当行グループは、報告セグメントは銀行業単一となるため、記載を省略しております。

**【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】**

該当事項はありません。

**【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】**

該当事項はありません。

## (1株当たり情報)

## 1. 1株当たり純資産額及び算定上の基礎

		前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当中間連結会計期間 (平成30年9月30日)
1株当たり純資産額		3,453 円 89 銭	3,511 円 85 銭
(算定上の基礎)			
純資産の部の合計額	百万円	147,913	150,663
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円	303	227
うち新株予約権	百万円	175	100
うち非支配株主持分	百万円	128	127
普通株式に係る中間期末(期末)の純資産額	百万円	147,610	150,436
1株当たり純資産額の算定に用いられた 中間期末(期末)の普通株式の数	千株	42,737	42,836

(注) 平成29年10月1日付で普通株式5株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額は、前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。

## 2. 1株当たり中間純利益及び算定上の基礎並びに潜在株式調整後1株当たり中間純利益及び算定上の基礎

		前中間連結会計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当中間連結会計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
(1) 1株当たり中間純利益		103 円 89 銭	93 円 44 銭
(算定上の基礎)			
親会社株主に帰属する中間純利益	百万円	4,440	3,997
普通株主に帰属しない金額	百万円	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 中間純利益	百万円	4,440	3,997
普通株式の期中平均株式数	千株	42,737	42,778
(2) 潜在株式調整後1株当たり中間純利益		103 円 55 銭	93 円 17 銭
(算定上の基礎)			
親会社株主に帰属する中間純利益調整額	百万円	—	—
普通株式増加数	千株	143	124
うち新株予約権	千株	143	124
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株 当たり中間純利益の算定に含めなかった潜在株式 の概要		—	—

(注) 平成29年10月1日付で普通株式5株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり中間純利益及び潜在株式調整後1株当たり中間純利益は、前連結会計年度の期首に当該併合が行われたと仮定して算出しております。

## (重要な後発事象)

該当事項はありません。

## 2 【その他】

該当事項はありません。



### 3 【中間財務諸表】

#### (1) 【中間貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	267,180	297,049
コールローン	3,971	761
買入金銭債権	13,696	11,160
商品有価証券	10	41
金銭の信託	1,000	999
有価証券	※1, ※7, ※10 958,490	※1, ※7, ※10 968,128
貸出金	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※8 1,676,468	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※8 1,694,926
外国為替	※6 6,288	※6 6,671
その他資産	67,114	85,965
その他の資産	※7 67,114	※7 85,965
有形固定資産	38,265	38,186
無形固定資産	3,294	3,222
前払年金費用	938	1,657
支払承諾見返	5,613	6,090
貸倒引当金	△17,795	△17,602
<b>資産の部合計</b>	<b>3,024,535</b>	<b>3,097,258</b>
<b>負債の部</b>		
預金	※7 2,628,469	※7 2,617,730
譲渡性預金	56,164	108,755
コールマネー	8,005	11,769
債券貸借取引受入担保金	※7 36,061	※7 75,029
借入金	※7, ※9 104,694	※7, ※9 93,039
外国為替	15	13
その他負債	29,238	25,508
未払法人税等	940	515
リース債務	1,190	1,111
資産除去債務	136	136
その他の負債	26,971	23,745
退職給付引当金	802	709
睡眠預金払戻損失引当金	1,333	1,151
ポイント引当金	39	42
繰延税金負債	6,835	7,004
再評価に係る繰延税金負債	4,474	4,472
支払承諾	5,613	6,090
<b>負債の部合計</b>	<b>2,881,749</b>	<b>2,951,317</b>

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成30年 3月31日)	当中間会計期間 (平成30年 9月30日)
純資産の部		
資本金	25,000	25,000
資本剰余金	6,563	6,563
資本準備金	6,563	6,563
利益剰余金	79,601	83,265
利益準備金	17,037	17,166
その他利益剰余金	62,563	66,098
別途積立金	50,000	55,000
繰越利益剰余金	12,563	11,098
自己株式	△871	△674
株主資本合計	110,292	114,153
その他有価証券評価差額金	27,421	26,070
繰延ヘッジ損益	△4,191	△3,469
土地再評価差額金	9,088	9,086
評価・換算差額等合計	32,318	31,686
新株予約権	175	100
純資産の部合計	142,786	145,940
負債及び純資産の部合計	3,024,535	3,097,258

## (2) 【中間損益計算書】

(単位：百万円)

	前中間会計期間 (自 平成29年 4月 1日 至 平成29年 9月 30日)	当中間会計期間 (自 平成30年 4月 1日 至 平成30年 9月 30日)
経常収益	23,803	22,455
資金運用収益	15,322	16,766
(うち貸出金利息)	10,098	10,057
(うち有価証券利息配当金)	5,137	6,639
役務取引等収益	3,217	3,194
その他業務収益	2,162	667
その他経常収益	※1 3,100	※1 1,827
経常費用	16,746	16,445
資金調達費用	1,381	1,548
(うち預金利息)	463	389
役務取引等費用	1,321	1,460
その他業務費用	1,087	1,034
営業経費	※2, ※3 12,403	※2, ※3 12,292
その他経常費用	※4 551	※4 109
経常利益	7,056	6,010
特別利益	0	9
特別損失	347	41
税引前中間純利益	6,709	5,977
法人税、住民税及び事業税	1,993	1,028
法人税等調整額	453	561
法人税等合計	2,446	1,589
中間純利益	4,262	4,387

## (3) 【中間株主資本等変動計算書】

前中間会計期間(自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
				別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	25,000	6,563	6,563	16,780	45,000	11,823	73,604
当中間期変動額							
剰余金の配当						△642	△642
中間純利益						4,262	4,262
自己株式の取得							
自己株式の処分						△6	△6
土地再評価差額金の取崩						109	109
利益準備金の積立				128		△128	—
別途積立金の積立					5,000	△5,000	—
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)							
当中間期変動額合計	—	—	—	128	5,000	△1,406	3,721
当中間期末残高	25,000	6,563	6,563	16,909	50,000	10,416	77,326

	株主資本		評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	△877	104,289	25,199	△4,054	9,690	30,835	135	135,260
当中間期変動額								
剰余金の配当		△642						△642
中間純利益		4,262						4,262
自己株式の取得	△3	△3						△3
自己株式の処分	14	7						7
土地再評価差額金の取崩		109						109
利益準備金の積立		—						—
別途積立金の積立		—						—
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)			4,569	△58	△109	4,401	16	4,418
当中間期変動額合計	11	3,733	4,569	△58	△109	4,401	16	8,151
当中間期末残高	△866	108,022	29,768	△4,113	9,581	35,237	152	143,412

当中間会計期間(自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	25,000	6,563	6,563	17,037	50,000	12,563	79,601
当中間期変動額							
剰余金の配当						△642	△642
中間純利益						4,387	4,387
自己株式の取得							
自己株式の処分						△83	△83
土地再評価差額金の取崩						2	2
利益準備金の積立				128		△128	—
別途積立金の積立					5,000	△5,000	—
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)							
当中間期変動額合計	—	—	—	128	5,000	△1,464	3,663
当中間期末残高	25,000	6,563	6,563	17,166	55,000	11,098	83,265

	株主資本		評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証 券評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	△871	110,292	27,421	△4,191	9,088	32,318	175	142,786
当中間期変動額								
剰余金の配当		△642						△642
中間純利益		4,387						4,387
自己株式の取得	△0	△0						△0
自己株式の処分	197	114						114
土地再評価差額金の取崩		2						2
利益準備金の積立		—						—
別途積立金の積立		—						—
株主資本以外の項目の 当中間期変動額(純額)			△1,350	721	△2	△631	△74	△706
当中間期変動額合計	196	3,860	△1,350	721	△2	△631	△74	3,154
当中間期末残高	△674	114,153	26,070	△3,469	9,086	31,686	100	145,940

## 【注記事項】

### (重要な会計方針)

#### 1 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

#### 2 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として中間決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

#### 3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

#### 4 固定資産の減価償却の方法

##### (1) 有形固定資産(リース資産を除く)

有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。)並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用し、年間減価償却費見積額を期間により按分し計上しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	19年～50年
その他	5年～15年

##### (2) 無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

##### (3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、零としております。

#### 5 引当金の計上基準

##### (1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

貸出条件緩和債権等を有する債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利率で割り引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は10,748百万円(前事業年度末は12,348百万円)であります。

## (2) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当中間会計期間末において発生していると認められる額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当中間会計期間末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の費用処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理  
数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理

## (3) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積もり、必要と認める額を計上しております。

## (4) ポイント引当金

ポイント引当金は、クレジットカードの将来のポイント利用による費用負担に備えるため、将来利用される見込額を合理的に見積もり、必要と認める額を計上しております。

## 6 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、中間決算日の為替相場による円換算額を付しております。

## 7 ヘッジ会計の方法

### (イ) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、繰延ヘッジによっております。ヘッジ取引は当行の有価証券等会計基準に則り、ヘッジ対象である一部の貸出金及び有価証券から生じる金利リスクを回避するため、ヘッジ手段として各取引ごとに金利スワップ取引を行う「個別ヘッジ」を実施しております。ヘッジ手段とヘッジ対象を一体管理するとともに、ヘッジ手段によってヘッジ対象の金利リスクが減殺されているかどうかを検証することで、ヘッジの有効性を評価しております。

### (ロ) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

## 8 その他中間財務諸表作成のための基本となる重要な事項

### (1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、中間連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

### (2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税(以下「消費税等」という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当中間会計期間の費用に計上しております。

(中間貸借対照表関係)

※1 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
株式	435百万円	435百万円
出資金	179百万円	232百万円

※2 貸出金のうち、破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
破綻先債権額	359百万円	257百万円
延滞債権額	35,614百万円	35,447百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

※3 前事業年度及び当中間会計期間において、貸出金のうち、3カ月以上延滞債権はありません。

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

※4 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
貸出条件緩和債権額	3,115百万円	3,376百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

※5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
合計額	39,090百万円	39,081百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

※6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
12,252百万円	10,605百万円



※7 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
担保に供している資産		
有価証券	182,977百万円	224,189百万円
計	182,977百万円	224,189百万円
担保資産に対応する債務		
預金	11,968百万円	4,713百万円
債券貸借取引受入担保金	36,061百万円	75,029百万円
借入金	91,811百万円	85,399百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
有価証券	48,986百万円	13,449百万円

また、その他の資産には、先物取引差入証拠金、金融商品等差入担保金、中央清算機関差入証拠金及び保証金等が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
先物取引差入証拠金	10百万円	11百万円
金融商品等差入担保金	8,322百万円	8,826百万円
中央清算機関差入証拠金	41,500百万円	64,800百万円
保証金等	722百万円	709百万円

※8 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
融資未実行残高	545,159百万円	553,402百万円
うち原契約期間が1年以内のもの 又は任意の時期に無条件で取消可能なもの	528,583百万円	539,961百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※9 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
劣後特約付借入金	10,000百万円	5,000百万円

※10 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
	20,384百万円	21,593百万円

(中間損益計算書関係)

※1 その他経常収益には、次のものを含んでおります。

	前中間会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
貸倒引当金戻入益	1,034百万円	一百万円
償却債権取立益	535百万円	263百万円
株式等売却益	278百万円	1,080百万円

※2 営業経費には、次のものを含んでおります。

	前中間会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
給与・手当	4,978百万円	4,966百万円

※3 減価償却実施額は次のとおりであります。

	前中間会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
有形固定資産	686百万円	693百万円
無形固定資産	304百万円	497百万円

※4 その他経常費用には、次のものを含んでおります。

	前中間会計期間 (自 平成29年4月1日 至 平成29年9月30日)	当中間会計期間 (自 平成30年4月1日 至 平成30年9月30日)
貸出金償却	90百万円	28百万円
株式等売却損	70百万円	42百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度(平成30年3月31日)

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	—	—	—
関連会社株式	—	—	—
合計	—	—	—

当中間会計期間(平成30年9月30日)

	中間貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	—	—	—
関連会社株式	—	—	—
合計	—	—	—

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の中間貸借対照表(貸借対照表)計上額

		前事業年度 (平成30年3月31日)	当中間会計期間 (平成30年9月30日)
子会社株式	百万円	119	119
関連会社株式	百万円	315	315
合計	百万円	435	435

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【信託財産残高表】

資産				
科目	前事業年度 (平成30年3月31日)		当中間会計期間 (平成30年9月30日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
現金預け金	70	100.00	65	100.00
合計	70	100.00	65	100.00

負債				
科目	前事業年度 (平成30年3月31日)		当中間会計期間 (平成30年9月30日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
金銭信託	70	100.00	65	100.00
合計	70	100.00	65	100.00

(注) 1 共同信託他社管理財産 前事業年度一百万円、当中間会計期間一百万円

2 元本補填契約のある信託については、前事業年度及び当中間会計期間の取扱残高はありません。

#### 4 【その他】

##### 中間配当

平成30年11月9日開催の取締役会において、第205期の中間配当につき次のとおり決議しました。

中間配当金額	859百万円
1株当たりの中間配当金	20円00銭

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の中間監査報告書

平成30年11月12日

株式会社四国銀行  
取締役会 御中

## EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 山 田 修 ㊞

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 伊 加 井 真 弓 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社四国銀行の平成30年4月1日から平成31年3月31日までの連結会計年度の中間連結会計期間(平成30年4月1日から平成30年9月30日まで)に係る中間連結財務諸表、すなわち、中間連結貸借対照表、中間連結損益計算書、中間連結包括利益計算書、中間連結株主資本等変動計算書、中間連結キャッシュ・フロー計算書、中間連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項及びその他の注記について中間監査を行った。

### 中間連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間連結財務諸表の作成基準に準拠して中間連結財務諸表を作成し有用な情報を表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない中間連結財務諸表を作成し有用な情報を表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した中間監査に基づいて、独立の立場から中間連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間監査の基準に準拠して中間監査を行った。中間監査の基準は、当監査法人に中間連結財務諸表には全体として中間連結財務諸表の有用な情報の表示に関して投資者の判断を損なうような重要な虚偽表示がないかどうかの合理的な保証を得るために、中間監査に係る監査計画を策定し、これに基づき中間監査を実施することを求めている。

中間監査においては、中間連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するために年度監査と比べて監査手続の一部を省略した中間監査手続が実施される。中間監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による中間連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて、分析的手続等を中心とした監査手続に必要に応じて追加の監査手続が選択及び適用される。中間監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な中間監査手続を立案するために、中間連結財務諸表の作成と有用な情報の表示に関連する内部統制を検討する。また、中間監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め中間連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、中間監査の意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 中間監査意見

当監査法人は、上記の中間連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる中間連結財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社四国銀行及び連結子会社の平成30年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する中間連結会計期間(平成30年4月1日から平成30年9月30日まで)の経営成績及びキャッシュ・フローの状況に関する有用な情報を表示しているものと認める。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- ※ 1 上記は中間監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。  
2 XBRLデータは中間監査の対象には含まれていません。

# 独立監査人の中間監査報告書

平成30年11月12日

株式会社四国銀行  
取締役会 御中

## EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 山 田 修 ㊞

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 伊 加 井 真 弓 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社四国銀行の平成30年4月1日から平成31年3月31日までの第205期事業年度の中間会計期間(平成30年4月1日から平成30年9月30日まで)に係る中間財務諸表、すなわち、中間貸借対照表、中間損益計算書、中間株主資本等変動計算書、重要な会計方針及びその他の注記について中間監査を行った。

### 中間財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に準拠して中間財務諸表を作成し有用な情報を表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない中間財務諸表を作成し有用な情報を表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した中間監査に基づいて、独立の立場から中間財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間監査の基準に準拠して中間監査を行った。中間監査の基準は、当監査法人に中間財務諸表には全体として中間財務諸表の有用な情報の表示に関して投資者の判断を損なうような重要な虚偽表示がないかどうかの合理的な保証を得るために、中間監査に係る監査計画を策定し、これに基づき中間監査を実施することを求めている。

中間監査においては、中間財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するために年度監査と比べて監査手続の一部を省略した中間監査手続が実施される。中間監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による中間財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて、分析的手続等を中心とした監査手続に必要に応じて追加の監査手続が選択及び適用される。中間監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な中間監査手続を立案するために、中間財務諸表の作成と有用な情報の表示に関連する内部統制を検討する。また、中間監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め中間財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、中間監査の意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 中間監査意見

当監査法人は、上記の中間財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社四国銀行の平成30年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する中間会計期間(平成30年4月1日から平成30年9月30日まで)の経営成績に関する有用な情報を表示しているものと認める。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
- ※1 上記は中間監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。  
2 XBRLデータは中間監査の対象には含まれていません。

## 【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の8第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年11月12日
【会社名】	株式会社四国銀行
【英訳名】	The Shikoku Bank, Ltd.
【代表者の役職氏名】	取締役頭取 山元文明
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	高知市南はりまや町一丁目1番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社四国銀行徳島営業部 (徳島市八百屋町三丁目10番地2) 株式会社四国銀行東京支店 (東京都千代田区内神田一丁目13番7号) 株式会社四国銀行松山支店 (松山市三番町三丁目9番地4) 株式会社四国銀行高松支店 (高松市丸亀町8番地23) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

(注) 高松支店は金融商品取引法の規定による縦覧場所ではありませんが、投資者の便宜のため縦覧に供しております。



1 【四半期報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当行取締役頭取山元文明は、当行の第205期第2四半期(自平成30年7月1日 至 平成30年9月30日)の四半期報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。